



教授の呟き

第66回

望まれる高付加価値の物流サービス

東京海洋大学教授

苦瀬博仁

●●● 物流の本来の目的

「物流を、コストダウンの対象と考えている人は多い。しかし物流の本来の目的は、付加価値を高めることだ。そうでなければ、物流がかわいそうすぎる」。これは、筆者に物流の手ほどきをしてくれたN先生の言葉である。商品の価値を高め、生活習慣や文化までも変えていく物流の役割を、強調したかったに違いない。

最近、しばしば「物流の品質確保」が話題になるが、これは5R (Right Time, Place, Price, Quality and Quantity) を通じて、「正確で確実に、時刻・場所・価格・品質・量を保証すること」と考えられる。

また「物流の効率化」とは、物流の品質を保ちながらも、「省資源化・省力化・省時間化・省費用化を達成すること」になるだろう。

一方「物流の高付加価値化」には、物流の品質確保と効率化を前提に、物流の機能を高めること、および物流の範囲を生産段階や流通段階にまで広げることである。

連載の第18回⁽¹⁾では、商品の高付加価値化を考えてみた。今回は、物流の高付加価値化を考えてみたい。

●●● 輸送の高付加価値化

ある新聞社から、「過去60年で、最も物流に影響を与えたものは？」という問いかけがあった。このとき、「輸送商品や輸送方法にあわせて、さ

まざまなトラックが開発されてきたこと」をあげた。⁽²⁾

エンジンをはじめとするトラックの性能向上もさることながら、タンクローリーや宅配専用車のように、多様な商品ごとの輸送ニーズや品質管理レベルに合わせて車両を開発することで、自動車輸送は付加価値を高めていったのである。

これと同じく高速道路網の整備が、長距離の自動車輸送ネットワークの拡大に大きな影響を与えた。しかし本格的な輸送の高付加価値化は、昭和50年代(1975)から急成長した宅配便に始まると考えてよいだろう。

宅配便は、消費者間や企業間の小口輸送サービスとして、翌日配送という新たな付加価値を付けたものである。その後さらにサービスを追加し、時間帯指定や、冷凍冷蔵品のためのクール便、そして通信販売の代金決済サービスまで拡大した。つまり翌日配送に始まり、時間管理・品質管理・金融決済へと付加価値を高めてきたのである。

●●● 物流の高付加価値化

輸送に限らず、物流全般についても高付加価値化はある。

決まった時刻に確実に納品できれば在庫も圧縮でき、生産性も向上する。こうして、JIT (ジャスト・イン・タイム) 配送が定着してくると、輸送・在庫・生産の連携が始まった。また流通センターでネクタイとハンカチを詰め合わせる贈答品セ

ットなどは、流通加工や包装を取り入れた物流の高付加価値化であり、これにより流通段階での商品管理も物流業務の対象となった。

さらに、資材の調達から生産を経て販売段階までの物流を、一体的にコントロールしている製造業もある。

このように物流の高付加価値化を積み重ね、生産段階や流通段階との連携を強めれば、SCM（サプライチェーン・マネジメント）に近づくことにもなる。

期待される新サービスの創出

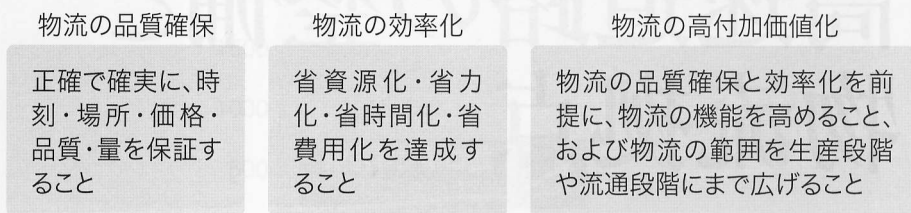
製品のライフサイクルが短い製造業では、コストダウンもさることながら、新製品開発に活路を見いだしている。もしも物流業界が、付加価値を高める新たなサービスを考えようとせず、コストダウンだけに頼るようなら将来は危うい。

過去に「物流の高付加価値化」があったからこそ、共同輸配送や納品代行も可能となったし、現在の3PL（サードパーティー・ロジスティクス）の成長やアウトソーシングの普及がある。

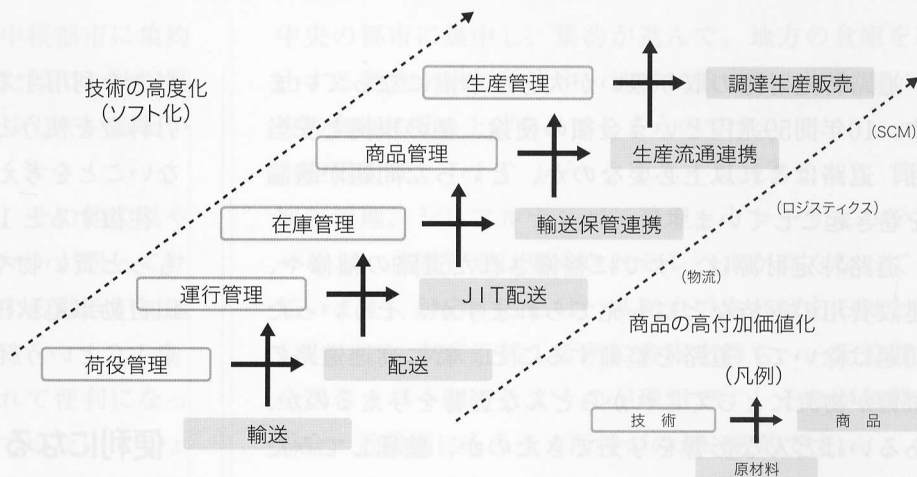
それゆえ物流の世界においても、高付加価値の新サービスを創出していくことが、明るい未来に繋がると思うのである。

- (1) 苦瀬博仁：教授の眩き、第18回「第3の物流『流通プロセス産業』を」、流通設計21、第35巻6号、pp108-109、2004年6月号
- (2) 苦瀬博仁：「過去と未来の『運び』を考える」、輸送経済新聞12面、2007年12月11日付

図表1 物流の品質、効率化、高付加価値化



図表2 物流の高付加価値化



- 例1 配送 → クール便(温度) → 代引き(決済) → 貨物追跡(管理)
- 2 配送 → 共同配送 → 納品代行 → 館内配送 → 物品管理
- 3 配送 → 配送・保管 → 配送・保管・流通加工・包装

Profile

東京海洋大学 海洋工学部
流通情報工学科 教授

苦瀬博仁

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により東京海洋大学、副学部長、評議員、流通情報工学科長を経て現職。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授(併任)。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)、「都市の物流マネジメント」(勁草書房) <http://www.2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/>

